

現代中東における宗派対立と宥和政策

—ヨルダンとスンナ派・シーア派三項対立—

平成 26 年入学
派遣先国：ヨルダン
池端 路子

キーワード：ヨルダン， 宗派対立， スンナ派， シーア派， 宥和政策， アンマン・メッセージ

対象とする問題の概要

現代中東における宗派問題については、スンナ派對シーア派という大雑把な二項対立で語られることが多い。しかしこの単純な二項対立では、現代の中東情勢は表しきれない。1979 年のイラン革命後に伸長したシーア系革命主義、そしてイラク戦争後に力を伸ばしたスンナ派系ジハード主義が、対立の主要な二項であるが、第三項としてスンナ派系の体制護持イデオロギーを加えることで、より正確に対立の構造を把握しようとするのが、本研究の試みである。

さらに、現代中東における宗派の関係は決して対立だけでなく、宥和を目指す動きも同時に存在する。この二つのベクトルがどのように存在しているかについて研究を行う。

研究目的

研究対象とするヨルダンは、上記の三項のうち、三つ目のスンナ派系体制護持イデオロギーの代表例である。そして、スンナ派・シーア派双方の急進的イデオロギーに挟み撃ちされる立場にありながら、宗派の宥和を唱えることでそれらと相対する。このヨルダンに焦点を当てることで、中東地域における宗派対立の構造を把握したい。現ヨルダン国王アブドゥッラー2 世は、2003 年に「アンマン・メッセージ」を発表した。これは宗派による違いを強調するのではなく、多くある互いの共通点を強調するべきであり、互いを不信仰者だと決めつけてはいけない、という内容の宣言である。対立の原因となる違いを棚上げすることで宥和の道を探ろうとするこのメッセージは、中東の様々な国々において認められ、多くのイスラーム法学者に受け入れられた。また、ヨルダン王家は預言者ムハンマドに連なるハーシム家の家系、スンナ派ムスリムの権威である。よって歴史的背景も含めた研究がなされるべきであろう。本研究の目的は、このヨルダンを軸とし、対立・宥和の二つのベクトルが併存する中でヨルダンがどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。

フィールドワークから得られた知見について

現地では、語学学校に週 5 日通いアラビア語の授業を受けた。集中的な学習により、速く語学力を向上させることができた。休日には本屋を巡り、現地でのみ手に入るアラビア語文献を収集するなどした。



↑現ヨルダン国王アブドゥッラー2世の命で建設され、国王の名を冠する「アブドゥッラー・モスク」。アンマン市民の祈りと憩いの場である。



↑アメル・アル＝ハーフィー教授。現代中東が抱える宗派の問題について様々な話をしてくれた。

また、アンマン・メッセージに関する情報の収集にもあたった。アンマン・メッセージの宣伝業務を担った NGO へ赴き、アンマン・メッセージの理念や、宣伝業務の内容についてお話を伺った。インタビューに応じてくれたアメル・アル＝ハーフィー氏は、スンナ派とシーア派の共通点を多く挙げ、互いの違いをあげつらうのではなく、共有する思想がいかに多いかを認めるべきだ、と語った。そして違いがあるということは、すなわち多様性であり、多様性があるということがムスリムにとってメリットになり得る、とも述べた。アンマン・メッセージの重要な理念である、互いの共通点の重視を、彼の言葉で様々な語ってくれた。

ヨルダンのハーシメト大学の教授で、アンマン・メッセージを研究対象とするジャマル・アル＝シャラビー氏にもお会いした。彼のようなヨルダン人の知識人と話すことで、現地の研究者が今抱えている問題意識、研究のトレンドのようなものを感じることができた。ヨルダン人が自国の問題についていかに語るかを直接聞いたのは、今回実際にヨルダンを訪ねてこそその収穫であった。



↑市場にて、リンゴの品定めをする女性。売り子の声が響く。



↑アンマン市街地の夜の風景。車の運転が荒く、クラクションが常に鳴り響いている。

以上に挙げたような、語学力の向上、文献収集、聞き取り調査といった、わかりやすい成果もあるが、休日に地方の都市を巡ってヨルダン国土の各地を自分の目で見たり、近所の住民やタクシー運転手などと世間話をしたり、強烈な日差しの下で乾燥した砂埃混じりの空気を吸い、クラクションが鳴り響く街中の喧騒を耳にし、アラブの料理を食したりといった、何気ない日常の中で得られたものも大きい。実際に行ってみなければわからない、インスピレーションが数多くあった。



↑ 古代ナバテア人の遺跡、ペトラ。ヨルダンにおける長い時の流れを感じさせる。



↑ 死海。カメラを向けると浮きながらポーズをとってくれた。

今後の展開・反省点

今回のフィールドワークでは、ほとんどの時間をアラビア語学習に当てた。語学力の向上が実感出来たことが一番の成果であるが、一方で NGO にインタビューに行くなどの聞き取り調査は、決して充分だったとは言えない。再びヨルダンを訪れる機会があれば、より多くの機関を訪ね、さらに掘り下げた質問をしたい。また、今回は自身のアラビア語力が足りないために、ヨルダンの一般の人々と会話をするのが難しかった。知識人は英語での会話が出来たため、調査を行うに問題なかったが、ヨルダンについてより深く知るためには、より多くの現地の人々とたくさん会話をする必要があると感じた。二ヶ月強をヨルダンで過ごしたことで身につけた語学力の土台に加え、今後もアラビア語の学習を継続し、次回ヨルダンを訪れた時には、より多くのヨルダン人とコミュニケーションを取りたい。